

題が発生したことが指摘されたのち、役割としては天龍寺に準拠して夢窓—春屋ライソンの中心拠点となり、等持寺の果した家利的機能をも併有し、僧録成立につぐ五山機構整備の最終段階であったと結論される。

第四節は永平道元流の中国に於ける法兄弟に相当する宏智派(わんしは)が、五山組織下に於て唯一の曹洞流として隆盛をとげること、中国趣味の横溢する性格が強味となったこと、朝倉氏の外護により戦国期に至っても違例の教団繁栄をとげた過程が論及されている。第五節は厳密な史料批判に基づき文和三年の総持寺住持峨山に対する南朝方からの禅師号勅諭問題を検討し、村田正志氏の報恩謝徳説をしりぞけ、当時曹洞教団全体にとって南北公武の対立に捲き込まれる危機的状況を峨山の適切な拒絶によって切り抜けたのであるという政治史的説明で結ばれている。以上、羅列的介绍に終始したが、本書の構成および手堅い実証手法は極めて正統派的であり、引用史料は千三百点を超し、しかも逐一その典拠が明らかにされているので筆者の如き初学にも

非常に有益な体系書を形造っている。禅宗が中世社会に果たした役割と問題点は本書によってほぼ出尽したと思われるが、ただ望蜀の感を述べさせて頂くなら、禅院の経済活動の側面、例えば建内記等に散見する禅僧の致富や都聞等東班六知事の活躍による祠堂銭の運用、全国に散在する五山領荘園の経営、および東班衆の他権門荘園に於ける代官請負活動の様相は室町社会の全貌究明に不可欠と考えられるが故に少しでも触れて頂きたかったが、むしろそれらは本書を基礎として私達が追求すべき今後の問題点であると思われる。最後に未熟な筆者の独断が、本書の価値を少しでも傷つけ、敬愛する著者に対し非礼を重ねていないかを恐れるものである。

(A5判 五四八ページ 昭和四五年八月刊
東大出版会発行 定価二、四〇〇円)
(今令明・京都大学大学院学生)

若林臺三郎著

加賀藩農政史の研究

上巻

加賀藩の研究は、明治期の永山近彰氏の大著『加賀藩史稿』・柄内孔次氏の『旧加賀藩田地割制度』以来、様々な観点から、数多くの研究がなされてきた。加賀藩は、幕藩制下最大の藩であり、もともと典型的な近世封建制下の藩として取りあつかわれ、近世初期農政史研究史上においても、十村制度や本著の主要な課題である改作法を中心とした研究が、著者を始めとして、中村吉治・佐々木潤之介氏等によって進められてきた。

著者、若林氏は、昭和十八年石川師範学校(現在の金沢大学教育学部)に赴任されて以来、二十余年、石川県下を隅なく歩かれ、新史料の発見につとめられると同時に、十二冊を超える石川県内の市町村史編纂にたずさわって来られた。こうした中で、本書は生まれた。

さて、本書は、前半の論証部分と後半の史料編とよりなり、史料編は、天正十年の羽咋郡福野村水帳をはじめ、改作関係の未刊史料が収録されている。前半の論証部分は、加賀藩制成立の基盤となった農政の進展を改作法を中心に追求したものであり、著者が昭和二十六年、「江戸時代に於ける土地売買と農民層の分解―加賀藩の切高仕法について―」（日本史研究一三三）を発表されて以来の問題を發展されたものである。

次に、本書の内容を編・章を追って見て行く。序説にて、現在までの藩制史研究の問題点を、戦後近世史研究の中で検討され、殊に、藩制史においては、「その地方の歴史について、自分自身の一貫した研究によって得た体系を示す必要」のあること指摘され、本書の意図を、「加賀藩制成立の基盤となった農政の進展を改作法を中心として追究し」「それに関連するあらゆる問題に触れながら、総合的に解明してみようというものである」と述べられ、本論に入るにあたって、藩政期の改作法の概念を、

『太平記』の秘伝・『加越能三州改作之初物語』等を検討する中で確定し、さらに明治以降における改作法研究の成果を整理されている。

第一編は、予備的段階として、天正九年の前田利家の能登入部から、二代利長・三代利常にいたる間をとりあげ、第一章で、加賀藩の成立過程とそれに対応する家臣団を検討し、特に家臣知行については、相給が普遍的であり、地方知行は、藩政当初から形骸化していた点を指摘され、第二章においては、初期検地帳の分析を通じ、改作法が当面した初期の村落構造、すなわち、初期本百姓（上層は地主的長百姓、無高屋敷持、高持無屋敷賄）からなる村落構造を論証し、第三章において、算用場奉行・郡奉行、初期扶持百姓の分析を通じて、鄉村支配組織が形成されたことを論じている。

第二編は、第一編につづく時期をとりあげ、第一章においては、越中検地につづく元和の加能両国惣検と、その結果としての高率課税によってひきおこされた寛永の危機を中心に、改作法の前史を概観し、改作

法の前提となった田地割制度についてふれ、第二章で、改作法の施行および経過を、先学の業績に、新史料を加え、確定する作業がなされ、改作法の要諦は、百姓一人一人に再生産能力を附与することを当面の目標とし、藩はそのため一時的な投資をしたとされている。第三章では、改作法の成果として、1役家制の終末、2平均免・定免法による税制の確立、3農民統制・掌握の三点をあげている。

第三編は、改作法完成以降、寛文・元禄にいたる時期をとらえ、第一章においては、改作奉行の常置・十村制度の確立・天正期以来長氏の所領であった鹿島半郡の接収と禄制改革によって、改作体制の整備をはかったことを論証し、第二章において、農政を除く生産・流通、すなわち林制の整備・塩専売仕法をとりあげ、さらに通貨政策、市町と交通機関、大坂登米を通じての流通機構の整備をとりあげ、第三章では、藩政初期以来の新田開発・農業経営・商品流通、改作法の仕上げともいうべき切高仕法を通じて、寛文・元禄期の農政を分析しておら

れる。

最後に、第一・二・三編の構成が、時代区分にしたがって叙述することにより、基本問題を横切りにしたという欠点をおぎなうために、1 給人知行の変化、2 本百姓の形成、3 郷村支配の整備、4 藩財政と流通経済の展開の四点を問題別に整理し、所要に応じて補説が加えられており、1 において、改作法が給人・百姓間を遮断し、領主権の進展、その制度的裏付としての封禄制の確立を見、2 において、寛文期を頂点として小農民自立の展開をとらえ、切高仕法が、流通経済の展開という現実の中で、改作法の主旨を貫徹したものととらえ、3 において、加賀藩制成立史上の重要課題として、改作奉行や十村制度の成立の重要性をと、4 において、改作法を支えた藩財政と、流通統制のあり方を述べ、最後に、中期以降の展望を述べて結んでおられる。

以上、粗雑ながらも、編・章を追って本書の内容を紹介してきたが、本書は、研究者が、史料を解釈するにあたって、全体の中でとらえず、おうおうにして、自己の御

都合主義的な解釈をしがちであるのに対し、改作法を中心に、近世初期加賀藩農政を実証的かつ具体的にあとづけられており、この点は、高く評価されるべきであろう。最後に、一つ注文をつけるなら、本書の分析史料および対象が能登国にあり、城下金沢のある加賀、および越中が欠落しており、この点、加賀藩制を深めて行くためにも、ぜひ、今後著者によって深められんことを望みたい。

また、上巻につづき、享保期から明治維新までの藩政史を中心にとりあげられた下巻も、すでに刊行されているが、与えられた枚数もつぎたので、その目次を次にあげて紹介にかえたい。

第一編 転換期の農政

第一章 享保期の農政

第二章 宝暦・天明期の農政

第三章 享和期の農政

第二編 改作方復古と天保改革

第一章 改作方復古と農政機構の变革

第二章 産物方再開と商品生産

第三章 天保改革と復元潤色

第三編 幕末藩政改革と農政

第一章 黒羽織免の出現

第二章 維新への胎動

第三章 維新期の農村問題

結論

史料編

(上巻 A5判・七四六頁、昭和四五年三月刊 四、五〇〇円、下巻 A5判・九九二頁、昭和四七年三月刊 七、五〇〇円、吉川弘文館)

(藤井譲治・京都大学大学院学生)

堺市史 続編第一巻

かつて昔の堺市史(全八巻、昭和五年刊)は名著のはまれ高く、今日もなおその要望があつて復刻され、いっぱんの書物愛好者や研究者に役立っている。本書は表題どおり、その名著の続編であり、続編の第一巻である。

この続編第一巻は、新しく堺市に編入された神石・百舌鳥・五箇荘・金岡・東百舌鳥・堀尾・深井・八田荘・鳳・浜寺・南八